反併呑！二・二八台湾の防衛と正名アピール行進

東京の空に響いた「台湾併呑反対」の掛け声

本会青年部部長　松下（まつした）　眞啓（まさひろ）

新宿の目抜き通りを行進（２月28日）

本会は友好諸団体とともに、去る二月二十八日、昨年同日に行われた「二・二八台湾正名運動アピール行進」に引き続き「反併呑（はんへいどん）！二・二八台湾の防衛と正名アピール行進」と銘打ったデモ行進を、東京・新宿区内で実施した。

一九四七年二月二十八日、これは台湾人にとって決して忘れることのできない日であり、中国人政権の残虐性を初めて体験した日でもある。すでに五十八年の歳月が流れたが、その爪跡は決して小さくはない―。

アピール行進当日は、前日の寒さが嘘のような暖かい好天に恵まれた。集合予定の午後三時、早春の陽光が燦々と降りそそぐ新宿・大久保公園には、平日にもかかわらず、中国の台湾への圧力に抗議する人々であふれた。

昨年のアピール行進は台湾総統選挙前であり、また土曜日ということもあって千人もの人々が集まった。今年の状況は一変している。しかし、一時的な熱狂ではなく、台湾を護り、またアジアの平和と安定と日本と台湾の友好を願う、真の有志たちがここに集まった。誰一人不安な顔をしている者はいない。爽やかな笑顔である。自然と胸が熱くなるのを必死でこらえた。

集まった総勢約三百人はそれぞれにプラカードや横断幕などを持ち、今にも飛び出さんばかりの熱気だ。中にはチベットの雪山獅子旗も見える。

出発式冒頭、本アピール行進の実行委員長である陳明裕（ちんめいゆう）氏より、感謝と断固闘うという決意の挨拶があつた。次いで、李登輝前総統から寄せられたアピール行進に対する激励のメッセージ（別掲）が朗読され、さらに会場の意気が揚がる。そして「二・二八台湾防衛アピール」が留学生・薛格芳（せつかくほう）さんによって朗読された。「台湾は、事実的にも国際法的にも、中華人民共和国に隷属しない一つの国家である」ことにもかかわらず、現在、中国政府は「反国家分裂法」なる法律の制定を目論んでいることが示され、これを断固阻止し、台湾併呑反対のため闘うことが、満場の拍手で採択された。

三時二十八分（台湾時間の二時二十八分）、「台湾併呑反対」「台湾を護るぞ」と声を挙げ、いよいよ行進が開始。

大久保公園から新宿の目抜き通りを通り新宿中央公園児童遊園に至る約三キロ。沿道には仕事中のサラリーマンの姿が多く見られた。その中を日章旗と台湾旗を先頭に、台湾の防衛と正名を求め、アピール行進は行く。「台湾

李登輝前総統「激励メッセージ」

本日二月二十八日は、台湾人にとっては決して忘れることのできない日です。

それは一九四七年のこの日、二二八事件が勃発したからです。台湾人はこの事件で、中国人政権の残虐性を初めて体験しました。当時、国家の将来を担うべき優秀なエリートを中心に、三万人もが虐殺されたのです。その惨たらしさは、おそらく日本の皆様には想像も及ばないものでしょう。

そして中国人は現在、再び台湾に不幸をもたらそうとしているのです。台湾の武力併呑の動きがそれです。中国が台湾併呑を正当化するため、今まさに制定しようとしている反国家分裂法などは、ならず者が他人の財産を奪うため、自分で勝手に作り出すような法律であり、これほど不条理なものはありません。

今後もこのような行為を許しつづけては、台湾のみならず、東アジア全体の法秩序は維持できなくなることでしょう。これは日本にとってもまったく他人事ではないのです。台湾も日本も真に平和を念願するなら、中国の侵略の野心を座視してはなりません。

私たちは本日、台湾において、中国の侵略と併呑に反対し、台湾を護るという運動を展開中ですが、東京でも在日台湾人や日本人がこれに呼応してデモを行われると聞き、とても感動しております。ことに台湾を応援してくださる日本の皆様の義侠心は、まことにありがたいことです。ここに台湾人民を代表して厚く御礼申し上げます。

お互いがんばりましょう。皆様の御健闘をお祈りいたします。

二〇〇五年二月二十八日

李　登　輝

併呑反対」「中国の台湾侵略反対」「日本は台湾と連帯するぞ」の掛け声のもと、一体となった集団がゆくのである。呆然と見送る者、写真を撮る者、また、沿道で留学生が配っているデモ行進のアピールが書かれたビラを読み、声援を送ってくれる人もいた。

約一時間半をかけて、新宿中央公園児童遊園に到着する。皆で一体となり声を挙げ、少なからず反応があったことは、大変な収穫であった。

直ちに解散式に移り、本会の柚原正敬事務局長よりアピール行進の総括並びに「反国家分裂法」を制定するために奔走する中国の動向が示された。今まさに日本と台湾は手を取り、共に毒牙を伸ばしつつある中国に対抗しなければならないのである。

「台湾万歳」で締められる予定の解散式は、「日本万歳」「日台共栄万歳」「チベット万歳」「台湾国がんばれ」と絶えることなく、心地よく東京の空に響き渡っていた（表紙2参照）。